

現代上下水道の

人物50傑

49

「第1篇 我思う故に在り」

今回の略伝執筆に当たり、私は7項目の質問書を送った。暫くして丁寧な回答と併せて小冊子が届いた。冊子の標題は、『第1篇 我思う故に在り』で、1977年から2009年までの約30年に書かれた所感55編が項目別に編集されている。デカルトの至言を想起させるが、それとは少し異なる。堤は、「この冊子の中に私の全てがある」と

語っているように思われた。私は、この略伝を堤の回答とこの小冊子を念頭に書くことにした。

は、キリスト信徒としての道を全うすること(略)、第二の拘りは、「物造りの理」に拘りつつ、施設設計一筋の道を歩いてきたこと」と書いている。まさに下水道分野を通じた求道者の姿である。

研教授となったが、天才肌で、その言動は時に横紙破りとも思えた。堤は、この荒馬の才能を開花させ、事業に結びつけた。それは、求道者としての堤の心性が萩原のそれと共鳴した所産であったのだろうか。

母上への深い思い、

堤は、1925年(大正14年)10月愛媛県宇和島市に生まれ

いく中で、家庭の中心にいて苦労を一人で背負い、若くして亡くなりました(略)私の前に母が愛用していた古ぼけた聖書が残っていました(略)その本性が鋭い感性と創造力を持ったな

母への深い思いが堤を信仰へと導いた。この意味で堤に最も大きな影響を与えた人は、他ならぬ母上であった。堤は、「座右の書は聖書で、聖書に目を通さない日はない」という。

三年先の見通しを立てる企業力 私の畏友森下典昭(元日水コン)は、堤の日本水コン社長就任(1985年)挨拶に感銘を受けたと言つ。挨拶には「稲田元顧問の教えに、三年先の見通しができるような企業力を身に付ける」という行がある。堤新社長は、このため「皆さんの息遣いが感じられるところで仕事をしたい」と社員に語りかけた。堤という人は、そういう慈しみと厳しさを備えた人である。

難しい。コンサルタント一人ひとりがクライアントの痛みを自らの痛みとする『都市の医師』でなければ、クライアントの要求を察知できない。企業は、職員が鋭い感性と創造力を持った限り、確固たる企業力を常備できないのである。堤は、優れたコンサルタントの集団としての企業を目指したのである。都市が存在する限りニーズは不減

「物造りの理」に徹する：夜空に道を尋ね、荒野を拓く求道者

た。生涯に出会った5人の求道者

知れば知るほど「堤は求道者である」と思われない。

堤 武

大正14年(1925)～



第一の拘り

格(略)、術や経営の真髄を学んだ。萩原は、異質である。後に京大防災

た。その後父上の仕事の関係で大阪市を経て中学2年の時滋賀県大津市に転居する。堤は、旧制膳所中学、三高、京大土木工学科へと進んだ。京大に入学した時、母上が逝去される。堤は、この時の思いを次のように綴っている。

「入学した時、お袋が5歳で亡くなるのです。(戦後の)食糧難が訪れ、その日暮しの生活が始まり、人々の心が荒んで

る透徹した類まれな技術者の姿がある。(文責・稲場紀久雄)